

教育者アリス・チップマン・デューイ
 ——シカゴ大学実験学校の影の立役者の思想と行動——

小 柳 正 司*

(2014年10月28日 受理)

Alice Chipman Dewey as an Educator : The Life and Thoughts of the Co-founder of the University of Chicago Laboratory School

KOYANAGI Masashi

Abstract

Alice Chipman Dewey (1858-1927) has been mostly known as a wife of John Dewey, and in his biographies she was most likely to be mentioned as the closest supporter and/or appreciator of her husband. In spite of such a stereo-typed image of Alice Dewey, there recently appears new evidence that regards her as a peculiar type of feminist, who was to be a full time housewife as well as a social activist engaging in betterment of women's rights. Alice Dewey belonged to the first generation of college-educated women in the late 19th century America, but unlike some other highly educated feminists of her generation (such as Jane Adams, with whom John Dewey had the intimate relationships in Chicago), she did not pursue a professional career. She gave birth to children, devoted herself to their rearing and education, while she engaged in various social activities as a wife of the University philosopher and educationist. She accompanied her husband in his wide-range intellectual life so as to make her own gifts effective and to attain her ambitions. On the surface, such an existence of her might seem to be a passive attitude toward the male-dominated society. At that time, however, for some college-educated young ladies like Alice, it was simply the emancipation from traditional family patriarchy to fall in with an ideal equal partner and compose a new family cooperatively with him.

In this paper, I try to focus on the essential role that Alice Dewey played with the University of Chicago Laboratory School, and to clarify the kinship of her ideas about family life to the educational ideals of the Lab School.

It was generally admitted that Alice was a co-founder of the Lab School with John Dewey, which would had not been there without her endeavors. Nonetheless, there was much more positive elements that connected her with the Lab School. Firstly, the Lab School was originally envisioned by Alice (and also by John Dewey) to continue and enlarge their home education. They had had three children in Ann Arbor,

* 鹿児島大学教育学部 教授

Michigan, and had experimentally tried to bring up their children in the unprecedented manner of anti-Puritanism. They considered it undesirable to send their children to an ordinary kind of public school, which would possibly have injured the distinctiveness of their children.

Secondly, Alice conceived that the stable foundation of democracy should be secured through the education of responsible citizens. In her paper on compulsory education, she insisted that the public school ought to be organized as the ideal home run by ideal parents, especially for the sake of those children who were growing up within unsound home environments and went directly into cruel life of labor. In this context, she desired that the education pursued in the Lab School should aim to be helpful for not only her own children, but also all the children within society.

key word: John Dewey/ feminism/ family/ ideal parents/ the University of Chicago Laboratory School

はじめに

ジョン・デューイの妻であるアリス・チップマン・デューイ (Alice Chipman Dewey, 1858-1927) については、これまでデューイのよき理解者、協力者というイメージで語れることがもっぱらであった。だが、はたして彼女はそのような既成の解釈枠組みの中に納まるような女性だったのかどうか。この点についての再検討の動きが近年ようやく始まった。

そのきっかけとなっているのが、膨大なジョン・デューイ書簡集の公刊である¹⁾。書簡集には妻アリスから夫のジョン・デューイに宛てた多数の手紙が含まれていて、それらの分析から、彼女は夫のよき理解者、協力者という側面とともに、それ以上に夫のジョン・デューイにとって唯一無二の相談相手であり、アドバイザーであったこと、ある意味で両者は対等なパートナーであり、共同研究者としてお互いに自分の意見や考えを交換していたことが知られるようになってきた。年齢的にもアリスはデューイより一歳年上であり、中西部ミシガン州の開拓者農場で育った独立自尊の精神の持ち主であり、大学教育を受けたアメリカ女性の第一世代に属し、ハイスクールや小学校の教師としての経験をもち、また教育研究者として自分の考えや信念を公開の場で発表し、論文を執筆し、そして女性の地位向上、わけても男女共学の推進と女性の参政権獲得のために積極的に活動する社会運動家でもあった。

これまでアリス・チップマン・デューイについてはデューイの伝記を扱った諸文献²⁾の中で付随的に触れられるのみで、彼女個人の思想と行動に焦点を当てた研究は見当たらなかった。しかし、最近になってアリス・チップマンを、女性史研究の視点をふまえ、独自のフェミニズム思想をもった人物として評価する研究が出された³⁾。ここでいう「独自のフェミニズム思想」というのは、世紀転換期のアメリカの高学歴女性の典型 (例えば、シカゴでデューイが親交をもったジェーン・アダムズやエラ・フラッグ・ヤングのような女性) とは異なり、自己の高い能力を活かす道を社会的な活動や専門的なキャリアの獲得に求めるのではなく、結婚、出産、育児に従事

し、妻として、また母親として、家庭生活とわが子の教育に熱意を注ぎながら、高度な専門職業をもつ夫と知的活動をともにすることで、社会貢献と自己実現を図ろうとする立場である。これは一見、男性優位社会への消極的な適応のように見えるが、実は家父長的な家族関係からの女性の解放と社会的自立を、女性自らの手による家庭生活の確立によって進めようとする思想である。とりわけアリスのような大卒女性第一世代にとって、家父長的家族に代わる新しい家族の形成は、出産・育児および家庭教育の科学的管理を通して達成されるべきものと考えられた。アリスにとって、また夫のデューイにとっても、自分たちがどのような家庭生活を営むかはそれ自体が一つの社会的実験としての意味をもっていた。二人にとって対等な夫婦関係のもとで新しい家庭生活を築き、出産・育児・家庭教育の科学的管理を通して新しいタイプの人間を育てることは、民主主義社会の基盤そのものを形成することに通じると思念されていた。

アリス・チップマン・デューイに注目した研究としては、わが国でも既に宮川麻里氏がデューイ夫妻の訪中講演資料を用いてアリス・チップマン・デューイの女子教育論を分析した論稿を発表している⁴⁾。ここでもアリス・チップマンはデューイの訪中に随行する妻である以上に、自ら中国民衆の前に立ち、女性解放と女子教育の必要性を訴えるフェミニストとして活動していたことが明らかにされている。

本稿では、考察の対象をシカゴ大学実験学校の開設にあたってアリス・チップマン・デューイが果たした役割にしぼり、彼女の思想と行動に焦点をあてて、それらが当時の初等教育に「新教育」と呼ばれる新次元の教育を要請するものであったことを明らかにしてみたい。

アリス・チップマンはデューイとともに実験学校のいわば共同設立者であり、彼女がいなければ実験学校は開設されなかったとまで言われている。アリス・チップマンは実験学校開設以来、常に実験学校の授業実践やカリキュラム開発において中心的な役割を果たし、1901年からは校長を務め、しかも自ら初等教育論を展開していた⁵⁾。デューイは『学校と社会』の第2刷（1900年）の序文において、妻アリスの明晰で経験豊かな知性は実験学校のいたるところに織り込まれていると述べており⁶⁾、また後年『思考の方法』（1910）の中では、この本は実験学校での妻アリスの仕事を通して実践的に確かめられた諸観念を論述したもので、基本的な考えはすべて彼女から教えられたものだとして述べている⁷⁾。哲学的な理論展開はデューイ自身のものであったとしても、学校教育の実践に関わる具体的な着想や洞察の面では、妻のアリスに負うところが多大であったことをデューイは率直に認めている。

1. 実験学校の共同設立者

シカゴ大学実験学校は、公式にはデューイによって設立されたことになっているが、事実上はデューイ夫妻による共同設立であったことが指摘されている。例えば、アメリカの代表的な女性人名録ではアリス・チップマンと実験学校との関わりについて次のような記述がなされている。

「1896年、シカゴ大学教育学科のもとに、ジョンとアリス・デューイの二人は小学校を設立した。のちに実験学校として有名になる。設立にあたってデューイ夫人は中心的な役割をはたした。夫の考えを現実の人間状況に適用したいと常々考えていた彼女は、彼の心理学と哲学上の仮説をテストする場として学校を用いることで、彼の諸観念を実践に翻訳することを求めた⁸⁾。」

また、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジでのデューイの学生で、後に同僚となり、週末にはデューイ夫妻のアパートで頻りに夕食をともにしたというマックス・イーストマンは次のように述べている。

「アリス・チップマンがいなかったならばデューイは実験学校を始めなかつたろう。デューイは尻を叩かれなければ考えること以外何もしなかつた——少なくともアリスにはしばしばそのように見えた。……デューイ夫人はデューイの考えをつかみ——そして彼をつかみ——そして何が為されるべきかを主張した⁹⁾。」

要するに、教育実践の現場をフィールドにして自分の哲学理論の有効性を確かめてみたいというデューイの思いを実行に移させたのはデューイ夫人だったというわけである。イーストマンによれば、夫人はデューイがなにごとにつけても逡巡ばかりしていて、なかなか実行しないことに「あなたは回り道ばかりしている」と言って苛立っていたという¹⁰⁾。観念の世界に安住しがちなデューイに対して、中西部の開拓者農場で育ち、なにごとに対しても失敗を恐れず果敢に挑戦するデューイ夫人。彼女がいなければ、世紀的教育実験はいつまでたっても始まらなかったに違いないとイーストマンは言う。

だが、実験学校開設にあたってのアリス・チップマンの「中心的な役割」は単にデューイに決断と実行を迫ったということだけだろうか。そもそもなぜデューイは実験学校を構想するようになったのだろうか。そして、アリス・チップマンがはたした「中心的な役割」とは実際どのようなものだったのだろうか。

デューイが実験学校を構想するに至った理由は大きく分けて二つある。一つは自分の哲学理論をテストする場として学校を用いることであり、もう一つは自分の子どもたちの教育のためである。1896年1月に実験学校が始まったとき、第一子のフレデリックは8歳、第二子のイヴリンは6歳になっていた。『デューイ・スクール』の著者の一人アンナ・キャンプ・エドワーズ (Anna Camp Edwards) によれば、デューイが実験学校を開設した直接の動機は、一つは「自分の教育哲学をテストすること」であるが、もう一つは「彼自身の子どもたちに成長と発達の機会を与えること」という「二重の願望」にあったという。しかも、教育哲学に関心をもつようになったのはなぜかと彼女に尋ねられて、彼は「主として子どもたちのためであった」と答えている¹¹⁾。同様のことはデューイの娘ジューンも書いている。「実験学校は、彼の子どもたちを彼自身が体験した学校時代の重荷から開放すべきものだった。」そして彼と妻アリスはシカゴに来て、自分たち夫婦と同じように、子どものために一般の学校でおこなわれている教育とは違った種類の教育を求めている一群の親たちと出会い、彼らの物心両面にわたる協力とシカゴ大学教育学科の賛

助を得て実験学校の開設にふみきったというのである¹²⁾。そして、再び『デューイ・スクール』の著者メイヒューとエドワーズによれば、「教育の諸原理を実践においてテストする学校」というアイデアは「関心を同じくするグループや友人たちが、この種の学校教育を自分たち自身の子どもに経験させたいという願望から生じた」のであり、実験学校開設の前年にデューイが『大学附属小学校組織案』(Plan of Organization of the University Primary School) という私家版のパンフレットの中で定式化した実験学校の一連の教育原則は、このグループの中で議論されてきた諸観念にもとづくものだったという¹³⁾。

実験学校開設の背後に「関心を同じくするグループや友人たち」の存在があったことがわかる。そして、アリス・チップマンがはたした「中心的な役割」についての具体的な記述はないが、おそらくはクレーン夫人 (Mrs. Charles R. Crane) やリン夫人 (Mrs. Charles R. Linn)、バートレット夫人 (Mrs. Adolphus C. Bartlett) といったアリス・チップマン同様、学齢期の子どもの教育に心を砕く大学教育を受けた大都市の中上流家庭の母親たちが、シカゴ大学に着任したばかりのデューイの周りに集まってきて、そこから母として、また妻として、育児や教育、特に家庭教育における親の義務や責任について議論する一種のサロンができあがり、そうしたグループの中でアリス・チップマンはデューイ夫人という立場で交流の輪に加わり、こうした高学歴の母親たちが抱く子ども像や家庭像などについて、夫のデューイともども彼女たちと価値観を共有するとともに、彼女らが求める理想の家庭教育から連続する形で一つの理想の学校を構想するようにデューイを導いたということが考えられる¹⁴⁾。『学校と社会』第1章冒頭に出てくる次の言葉は、そういう文脈で読むことができるだろう。

最も優れた最も賢明な親が自分の子どものために望むもの、それをこそ社会はそのすべての子どもたちのために望まなければならない。これ以外のいかなる理想も私たちの学校にとっては狭隘であり、好ましくない。それでいくなら、私たちの民主主義を破壊する¹⁵⁾。

家庭と学校と民主主義——この三者をつなぐものは、わが子の教育に心を砕く上述の母親たちの存在である。彼女らは多かれ少なかれ、シカゴの革新派 (progressives) の名士である夫たちとともに市政改革や教育改革に関心を寄せ、またジェーン・アダムズのハル・ハウスの活動に自ら積極的に関わりをもち、移民の貧困対策や児童労働の制限、保育所の設置等々の運動に加わったり資金提供をしたりした。その際、彼女ら (およびその夫たち) の価値基準になっていたものは、夫婦とその子どもからなる一家団欒の健全な家庭生活である。大卒女性第一世代である彼女らは、学校教育を通じて因襲的な地縁・血縁の社会から自らを開放するとともに、自由な都市空間の中で一組の男女が対等な関係の中で出会い、そこに新家庭を築くことによって、女性と子どもを家父長的な社会構造から一挙に解放できると考えていた。そして、産業都市シカゴにはびこる利権がらみのボス政治を打破するためには、下層労働者や移民の間に安定した健全な家庭生活を保障

し、彼らを責任ある市民へと成長させなければならないと考えていた。その切り札になるのが「最も優れた最も賢明な親」がおこなう家庭教育であり、子どもの教育を中心に一組の夫婦が親としての責任を自覚し、そこから社会に対する責任を自覚する市民へと成長していくことが、民主主義の基盤になると思念された。

「最も優れた最も賢明な親」がおこなう家庭教育の典型は、ほかならぬデューイ夫妻に見られる。彼らはミシガンからシカゴへの転居に際して、自分たちの子どもが通う学校を慎重に選んでいる。デューイはシカゴ大学に着任早々、妻アリス宛の手紙で「私はできるかぎり時間をとって、どこかわれわれの気に入るところはないかと幼稚園教員養成所と一二のすぐれた小学校、それにフランシス・パーカーの師範学校を見てまわっている」と書いている¹⁶⁾。デューイ夫妻が自分たちの子どもが通う学校を慎重に選んでいるのは、彼らの間に通常の公立学校の教育に対する強い不満があったからである。それは、ただ単にクレーマーとして公立学校に不満を抱いていたというのではなく、子どもの教育に全面的な責任を負う親として、それまでの自分たちの育児の方針に沿う形で、本当に自分たちの子どもにふさわしい学校教育を求めたとき、その要求に一般の公立学校ではどうもいっえられないという判断である。

実験学校が開設される1年あまり前、妻宛の手紙の中で、デューイは自分が思い描く理想の学校の姿を次のように記している。そこには後に実験学校で取り組まれる教育実践の最も原初的なイメージが語られている。

このところずっと私の頭の中には一つのあるべき学校の姿がふくらんできている。その学校では、実際の文字どおりの構成的活動 (constructive activity) が中心に置かれ、すべてはそこを起点にして始まり、二つの方向へと成長していく。一つは構成的活動にともなう子どもたちの社会性の側面、もう一つは構成的活動に材料を提供する自然との関わりである。私が理論的に構想しているのは、模型の家を作る大工仕事が一方向で社会性の訓練になり、他方で科学の訓練になるとともに、肉体的にも眼と手の積極的で具体的な習慣の獲得につながることである¹⁷⁾。

この理想の学校のイメージは、ちょうど学齢期に達した自分の二人の子どもに、今まさに必要な教育は何かと考える中で生まれたものである。上の引用部分に続けて、デューイはこの種の教育は自分たちの子どもにとっても救いになるものだとアリスに告げている。

学校についてのこの一般的な理論化は、私たち自身の子どもが通うことのできる学校が見つからないときに救いになる。しかし、大部分はモリス [末子] のような幼い子どもの示す絶対的に正常な知性を大事にしたいという私自身の思いから発している。そして一部分には、子どもたちがありきたりの学校から逃れられたら嬉しいということもある。君が子どもたちの悪行について言っていることはわかるし、彼らにはいま学校に行く癖をつけることが必要だと私も思う。しかし、少なくとも彼らは彼ら自身の知性をもっているのだし、彼らなりの判断というものもある——彼らと同年齢のたいいの子どもたち以上にそう言える。憎むべきことは、子どもたちがこうした長所をもつがゆえに不利益をこうむり、彼らを知るよしもない不幸を負うような目にあうことである¹⁸⁾。

デューイは自分の子どもたちが普通の公立学校に通うことになったら、かなりの困難ないし不適応を起こすだろうと見ている。第3節で見ると、デューイ夫妻はアナーバー [ミシガン大学の所在地] で前例のない育児に取り組み、周囲を驚かせてきた。それは「幼い子どもの示す絶対的に正常な知性を大事にしたい」というデューイの（そしてアリスの）思いから発した独特の家庭教育である。そうした家庭教育の中で育ってきた自分たちの子どもを普通の公立学校に入れたら、彼らも「長所」はだいなしにされてしまうだろう。それはなんとしても避けたい。デューイが理想の学校を思い描き、やがて自ら実験学校を開設することになった背景には、このようなデューイの父親としての思いと、公立学校不信があったことは確かである。そして、それは同時に妻であり母であるアリス・チップマンの思いでもあったはずである。残念ながら、この時期デューイが妻アリスから受け取った書簡類の多くは残されていないので、実際にアリスが妻として母として子どもの教育について何をデューイに語っていたのかを直接知る手掛かりはない。しかし、以下のような義務教育についての彼女の見解を見ると、彼女もまたデューイとともに公立学校不信を共有していたことは確かである。

2. アリス・チップマンの義務教育観

アメリカでは1852年のマサチューセッツ州を皮切りに、各州で順次義務就学が法制化されたが、その結果、一つの大きな問題に直面していた。それは公立学校の無秩序化 (blackboard jungle) である。義務就学の法制化は、一面では下層の子どもたちを過酷な児童労働から庇護するために必要とされたが、他面ではもともと学校の文化や秩序にそぐわない子どもたちを教室に多数抱え込むことになり、教師への反抗や授業妨害が日常化していた¹⁹⁾。アリス・チップマンにとって問題の本質は次のように捉えられた。すなわち、学校ではこうした子どもたちに厳格な規律訓練と初歩的な読み書き訓練を施すことで、彼らを安価で生産性の高い労働者へと育成することがめざされていて、学校がおこなう教育は彼らの本当の学習要求に答えていない。そのうえで、彼女は学校の教師たちに向かって、生徒たちの反抗を抑えること (conquering the reaction) ではなく、教師の教え方を変えること (changing the action) が必要だと訴えた²⁰⁾。

賢明な親のもとで健全な家庭生活を送る機会に恵まれず、そのまま児童労働の世界に投げ込まれていく子どもたちにとって義務就学にはどのような意味があるのだろうか。アリス・チップマンの答えは、学校が現実の親と家庭に代わる「理想の家庭教育」の場となることである。理想の家庭教育においては、子どもは一人一人かけがえのない存在として大切に育てられる。子どもは労働力であったり、家業の跡継ぎであったり、親の老後の保障であったり、大人のおもちゃであったりしてはならない。子どもは純粋無垢な発達の可能態として無条件に受け入れられ、未来の社会の担い手としてその成長が保障されなければならない。子どもの本性に逆らわない形で、子どもの本性を望ましい結果へと導き、やがて彼らを将来の民主主義社会の健全な担い手へと育てる

ことは、親と教師の責任であり義務である。

アリス・チップマンの（そしてジョン・デューイの）実験学校開設に至る思いはその出発点だが、一組の男女が対等な関係で新しい家庭を築き、理想の家庭教育を実現することに置かれている。実験学校は単にデューイ夫妻の子どもたちにとっての救いとなるだけではなかった。彼らがアナーバーで開始した家庭教育から連続する形で、いまや学齢期に達した二人の子どものために想い描く理想の学校の教育は、同時に社会のすべての子どもたちにとっての救いとなるものでなければならなかった。先に引用した『学校と社会』第1章冒頭の言葉はそのような意味に読めるだろう。

3. デューイ夫妻の家庭教育と実験学校

1) 結婚観

デューイとアリス・チップマンの出会いから結婚に至るまでの経緯については、娘ジェーンによる「ジョン・デューイの伝記」やダイキューゼンの『ジョン・デューイの生涯と思想』に詳しい²¹⁾。ウィリンダ・サヴィッジの研究とイレヌ・ホルの研究ではさらに詳細な事実が明らかにされている²²⁾。ジョンとアリスの二人は通常の夫婦とはかなり異なる結びつき方をしている。二人は最初、ミシガン大学で哲学の新任講師と哲学科の女子学生として出会い、たまたま下宿先が同じで、哲学科のゼミや研究会での議論を通じて互いを理解し合っていたという。二人が結婚前にやり取りした書簡をみると、二人は互いに知的に影響し合っていて、そしてそれが二人を愛情の上でも引きつけあっていたことがわかる。例えば、ある手紙でアリスはジョンの草稿にコメントをつけ、「社会有機体については、ジョージ・モリスから聞いていたので、さほどの新鮮味はないけれど、いくつかの点はこれまで読んだものの中で一番わかりやすい」と書いている²³⁾。こういったやり取りをかなり活発にやっている。

結婚後、妻のアリスからの影響でデューイは次第に社会の現実問題へと目を向けるようになった。これは娘ジェーンが著したデューイの伝記以来の定説である。アリスはミシガン大学哲学科に在学中「精神（mind）が新知識を創り出すのではない。精神はただ私たちが経験から得る素材に働きかけるのみである」と書いている²⁴⁾。知識は経験を素材にしてそのつど構成され再構成されていくものだという理解である。中西部の開拓者農場で育った彼女にとって、哲学は純粋な精神活動である以上に、具体的な実践経験に指針を与えるものでなければならなかった。そして、デューイが理論と実践の結合を言い始めるのはアリス・チップマンと出会って以後のことである。それまで「経験」をヘーゲル哲学の「意識の経験」のレベルでのみ捉えていたデューイの目を、現実世界と格闘する人間の実践経験へと向けさせるうえで、アリスの存在は不可欠だった。

ジョンとアリスの関係は、ア) 哲学の教師と学生という関係、イ) 大学の研究者とその妻という関係、ウ) 家計の稼ぎ手と専業主婦という関係の、いずれの要素ももちながら、なおかつそれ

らのいずれをも超えているという関係だった。二人はめいめいが自分のキャリアをもつというのではなく、ジョンの職業が家族の生活を経済的に支えながら、なおかつ互いに対等で独立の存在であり続ける関係を維持しようとしていた。

特に、ミシガン大学時代後期になってデューイが哲学科の主任教授になるにおよんで、教授夫人としてのアリス・チップマンの活動は精彩を放った。デューイの自宅は常に学生や隣人や大学の同僚とその妻たち、客員講師などが集うアナーバーでも最良の知識人の集会所になっていたが、それを事実上主宰していたのは妻のアリスであった。彼女は家事よりも知的談論に興味をもち、客人は彼女の知的関心の幅広さに感心させられた。そして「デューイは彼の妻に会話全体を取り仕切る機会を与えていました。というのも、彼女はそれを大変楽しんだものですから」という証言があるほどである²⁵⁾。また、ミシガン大学には女性の教授スタッフがごくわずかしかなかった関係で、アリスのような高等教育を受けた教授の妻たちは女子学生にとって勉学生活上のよき指導者 (mentor) ないし相談相手 (supporter) の役割をはたしていた。そうした中で、アリスは1890年にアナーバーで女性連盟 (Women's League) の設立に関係し、女子学生のために週1回自宅を開放する活動に加わった²⁶⁾。

2) 家庭教育の実践

ジョンとアリスの関係は子育てにおいても通常の夫婦とはかなり異なっていた。当時、大学教授クラスの中流家庭では、家事と育児はお手伝いさんを雇うのが通例であったが、ジョンとアリスはそうしなかった。つまり、ジョンとアリスは家庭の中に第三者を入れず、自分たちの手で家庭教育を実践しようとしたのである。これに対して、二人のミシガン大学時代の友人のアビー・ヒッチコック (Abby Hitchcock) は、シカゴの富豪アドルフス・バートレット (Adolphus Bartlett) と結婚したため、上流家庭の流儀に屈して、出産後子どもから引き離されたうえ、自分の子どもを二人の看護婦の手にゆだねざるを得なかった。富豪の家では、子どもは父と母の子ではなく、家産を受け継ぐ家の子だったからである。これを知ったジョンとアリスの二人はアビーのことを「悲劇」だと受けとめている²⁷⁾。

ジョン・デューイはきわめて協力的な父親で、ありとあらゆる育児仕事を当然のこのように引き受けた。オムツの取り換えや、子どもの遊び相手をするのはもちろん、病気の子どもの看病にあたるのはいつもジョンの役目であった。また、アリスが出産で不在の時には、ジョンは一人で子どもたちの世話をしたのだった²⁸⁾。

3) 観察と自由放任

デューイ夫妻が親として取り組んだ家庭教育の実践は、ちょうどこの時代の欧米各国の都市部に生まれつつあった新中間層と呼ばれる新しい階層の人々の考え方を先取りするものであったように思われる。それは、親子の間に第三者を介さない親密な親子関係 (特に安定した母子関係)

を構築し、健全な家庭環境の中で親が子どもの教育と将来について全面的な責任を負うこと、そして親は常に子どもに細心の注意を払い、子どもの自発性を尊重しながら、子どもの要求に見合った教育環境を整えることである。1899年の全米母親大会（National Congress of Mothers）第三回大会で会長のアリス・バーニー（Alice Birney）は「今日の最大の害悪は親の無知と無能である」と述べ、子どもの問題は母親の問題と切り離せないと論じている²⁹⁾。そして、翌年出版されたエレン・ケイの『児童の世紀』は、自由恋愛による結婚と出産、母性による家庭教育の確立、男女共学と教育の機会均等の実現を通して、女性解放と児童の権利確立を達成することを訴え、デューイの『学校と社会』と並んで、20世紀の児童中心主義のバイブルとなった。

デューイ夫妻は、徹底した観察にもとづく子ども固有の世界の発見と、子どもの生来の活動に即した科学的な育児法を求めていた。彼らはアナーバーで3人の子どもをもうけていた。1887年生まれの長男フレデリック（Frederick）、1890年生まれの長女イヴリン（Evelyn）、そして1893年生まれの次男モリス（Morris）である。デューイは「これら3人の子どもを観察することによって、生得的諸傾向の重要性についてウィリアム・ジェームズから学んだことを実践的に確信するようになり、幼児期の正しい発達に大きな重要性を認めることになった³⁰⁾。」彼は、第一子のフレデリックが生まれた1887年から第三子のモリスが生まれた1893年までの間、自分の三人の子どもについて観察をおこない、その結果に基づいて「幼児言語の心理学」という論文を書いた³¹⁾。シカゴに移ってから、デューイは幼いモリスの行動を毎日きめ細かく観察して、その様子を妻アリスに手紙で報告している³²⁾。また、シカゴに移ってからのことだが、デューイ夫妻は第一子のフレッドと第二子のイヴリンの二人にシカゴで生まれた弟のゴードン（第4子）と妹のジェーン（第5子）の子守りをさせながら、幼児の行動の様子について観察をおこなわせ、両親に報告させている³³⁾。

デューイ夫妻の子育ては徹底した自由放任であった。実際、近所の住人の一人は「デューイさんの家のお子さんたちは普段やりたいことを何でも自由にやっていました」と証言している³⁴⁾。しかし、それは無責任な放縦というよりも、むしろ世間並みの大人の価値観から離れたときの子どもの生来の姿を観察するためであったようだ。いわば、実験的に試みられた放任ということである。例えば次のようなエピソードが報告されている。

デューイのミシガン大学時代の同僚であったトマス・トゥルーブラッド（Thomas Trueblood）教授は、デューイが自分の子どもたちを観察対象にしていたことについて、次のような思い出を語った。あるとき、トゥルーブラッド教授は夫人とともにデューイ家にディナーに招かれた。夫妻は、デューイと夫人のアリスが子どもたちの教育について興味深い理論と実践を発展させようとしていることをまったく知らなかった。子どもの一人がトゥルーブラッド夫人を標的にしてものを投げようとするので、夫人は自己防御のためにその子を制止しようとしたが、デューイ夫人が頭を横に振りながらこうささやいた。「そのままにしておいて。パパがその子を研究しているの。」³⁵⁾

もちろん、すべてが研究のための放任であったわけではないであろう。が、やはり全体として

デューイ夫妻の間には、ピューリタニズムの世話やきのな干渉を嫌って、意図的に放任を試みるという姿勢は強かったように思われる。つまり、教育とは子どもの自然を否定することではなく肯定することだという教育観を自分たちの家庭で試してみるという姿勢である。子どもたちはよほどのことがないかぎり、まずは自由にふるまい、自分で自分を試しながら成長していくべきであって、大人が先回りをして手を出すことは、たとえ子どものことを思う親心からであっても、子どもの生きる権利を侵害することに等しい。これは理論というよりも家庭生活と子育てに関する信条といったものであり、デューイ夫妻はこうした新しい子ども観・育児観を二人の間で共有するとともに、ピューリタニズムの古い子ども観・育児観への挑戦を大胆に試みる若い夫婦だったということである。

デューイ夫妻の子育ては、その常識やぶりの特異さゆえに近所の住民や知人の間で「デューイ式育児法」(Dewey methods) として評判になった³⁶⁾。それにまつわるエピソードにはことかかない。中でも有名なものはバスタブ事件である。ミシガン大学哲学科の同僚であったアルフレッド・ロイド (Alfred Henry Lloyd) は、デューイ家の父子関係が普通の家庭とはかなり違っていたことを次のように回想している。

ある日デューイが自宅の書斎で研究会をおこなっていたとき、一番上の子のフレッドがバスタブに水をいっぱいはって何隻か船を浮かべて夢中になっていた。この実験の最中にバスタブから水があふれて階下流れ出した。フレッドは客たちにかまわず、いきなり父親に助けを求めた。みんなはフレッドがこう叫ぶ声を聞いた。『ジョン・デューイ、すぐここに来て床をふくのを手伝って。』³⁷⁾

この時代、少なくとも中産階級の家庭では、息子が父親をファーストネームで呼びつけるのはかなり無作法なことだったようである。

また、ロイド夫人の回想によれば、ちょうど寒さの厳しいおり、どこの親も子どもたちに靴とストッキングをきちんとはくように言い付けていたのに、デューイ家の子どもたちはそういう拘束を受けていなかったらしい。そこで近所に住む一人の婦人が親切にもデューイ夫人に忠告するために警察官を呼んだ。すると、彼女は警察官に向かって即座にこう言った。「あなたの仕事はほかにあるでしょう。私は私のやり方でちゃんと子どもを育てています³⁸⁾。」

デューイ夫人については次のような話も伝わっている。アナーバーで第三子のモリスを出産するとき、デューイ夫人は世間を驚かす常識破りの考えを実行した。夫人の分娩中に二人の子どもが部屋を出たり入ったりするのを許していることを知って、友人や近所の人たちは衝撃を受けた。しかも、夫人は子どもたちに出産に立ちあう機会を提供しながら、赤ちゃんはどのように生まれてくるのか誕生のプロセスをその場で説明していたというのである。主治医の女医はこういうやり方に強く反対したが聞き入れられなかった。その女医はとうとうデューイ家の家庭医をやめてしまった。彼女は前々からデューイ夫人の子育てに疑問を抱いていた。というのも、子どもたちはいつも風邪をひき、鼻水をたらしていたからであった³⁹⁾。

さらに、デューイの家の近所に住んでいた別の人の話として次のようなエピソードが伝えられている。

ある日デューイ夫人は階下において、子どもたちがみょうに静かなことに気づいた。それで、どうなっているのか確かめることにした。デューイ家の子どもたちは普段やりたいことを何でも自由にやっていたから、ひごろはまったくにぎやかであった。そのため、デューイ夫人が注意を払うときはいつも彼らが静かになったときだった。屋根裏のドアがきしんでいた。夫人は階段を静かにのぼっていった。見ると、三人の子どもがみな素っ裸になっていた。いや、フレッドだけはシルクハットをかぶり、傘を手にしていた。彼は屋根裏の床を荘厳にのし歩き、ほかの二人は隅にうずくまっていた。「フレッド、あなた何してるの」と夫人が尋ねると、フレッドは答えてこう言った。「ぼくたちはエデンの園の^{その}アダムとイヴをやっているんだ。ぼくは夜の冷氣の中を歩いている主なる万能の神だ。イヴリンとモリスはアダムとイヴで、主に見られないように隠れているのさ。」⁴⁰⁾

ここでフレッドがやっていることは後の実験学校の授業風景を彷彿とさせる。というのも実験学校では、幼い子どもたちが古代ギリシアの歴史と文学を学ぶ中で、古代ギリシアの鎧や兜の模型を厚紙で作ってそれらを身に付け、実際に戦いの場面を再演しながら学習に取り組むというようなことをやっているからである。実験学校の原形はミシガン大学時代のデューイの家庭の中にあつたと言えどももちろんそれは言い過ぎである。しかし、実験学校はデューイ夫妻の反ピューリタニズムの育児スタイルと教育方針が、彼らの子どもたちの成長とともに、家庭から学校へとそのまま拡大していったものと見ることは十分に可能である。

4) 自発と誘導、家庭環境の整備

ジョンとアリスの二人が、彼らの家庭教育において最も大切にしていた人格的価値は「独立心」(independence)と「自恃」(self-reliance)であった。例えば、アリスは子どもに親元から離れる経験をさせることが独立心を育むうえで重要だと考えた。そして、しばしばそれを実行し、子どもたちが「自分で自分のことができるように育つことの大切さを示している」ことに満足を感じ、夫のジョンに報告している⁴¹⁾。特に第一子のフレッドは、シカゴ時代に一人で何週間もハル・ハウスに逗留したり、ニューヨーク州ハリケーンにあるデューイの山荘に一人だけ家族と別れて知人と一緒に留まったり、12歳の夏休みにはカリフォルニアの牧場に一人で体験旅行に出かけたりした。また、フレッドは切手収集、大工仕事、写真などに次々と趣味をもち、そのたびにジョンとアリスは彼にスタンプや大工道具やカメラや書籍など必要なものを買って与えて、彼がそれらに熱中するのを側面から援助した⁴²⁾。一時期アリスが雇っていた子守りの女性はフレッドのことを「自分で何でもできる子」と評し、アリスを喜ばせている⁴³⁾。

一見、子どもがやりたいと思うことを何でも自由にやらせているように見えるが、同時に、ジョンとアリスは独特のやり方で子どもに「自制心」(self-control)を求めている。その意味では、二人は親が求める規律に子どもが自発的に従うように仕向ける自己規律(self-discipline)の仕付

けを怠らなかつた。例えば、幼いモリスが痲癩を起した時、ジョンは彼を押さえつけたり制止したりする代わりに、モリスを一人にして、彼の顔に二度水しぶきをかけておとなしくさせている。そして「彼は完全な自制心をもっている。彼は泣きわめいてもどうにもならないことを知れば、泣きわめくことを自分からやめることができる」とアリスに報告している⁴⁴⁾。また、フレッドが狩猟用の銃を欲しがったとき、アリスは「取り返しのつかないダメージを与えるような物をもつことに正当性があるかどうか、私にはよくわからない」と答えて、あきらめさせている⁴⁵⁾。

「独立心」と「自恃」それに「自制心」——これらは、この時代、シカゴのような産業都市に出現しはじめていた新中間層の人々が、家庭で自分たちの子どもに求める代表的な徳性でもあった。新興の都市住民である新中間層にあっては、伝統的な同族集団や地縁社会の狭い人間関係を脱して、個人が自らの才能や能力を発揮しながら、自由で開かれた競争社会の中をたくましく生き抜いていく人間が理想とされた。そのためには、親は子どもの自主性を最大限に尊重し、なおかつそれが野放図に陥らないよう、子どもを不断に注意深く観察し、親が考える望ましい結果を子どもに押しつけるのではなく、それを子どもが自発的に達成できるように、自発と誘導をうまく組み合わせながら育児計画・教育計画をたてていく。そして、そのために親は子どもの食事から遊びや趣味、お稽古事、さらには交友関係に至るまで、生活のあらゆる面に怠りなく注意を払い、遊具、絵本、図鑑、靴や鞆、その他さまざまな子どもの持ち物、衣服、子ども部屋、そして一家団欒や行楽などについても、すべては子ども中心に、子どもの健やかな成長を考えて細心の準備をおこない、家庭環境を整えるのである。

子ども中心に家庭の教育環境を整えるという点ではデューイ夫妻はずっと時代の先を行っていたように見える。例えば、シカゴに転居する直前、アリス・チップマンはフレッドとイヴリンを連れてヨーロッパ旅行をおこなっているが、それはこの二人の子どもに語学習得とヨーロッパ文化を肌で学ぶ機会を与えるためであったという⁴⁶⁾。彼女はパリ滞在中、毎朝フレッドとイヴリンにフランス語の本を読み聞かせた。そして、美術館やオペラやベルサイユに連れて行ったり、絵画とフランス語の教師を雇ったりした。そのうえで、二人の子どもが正規の学校教育を受けないままにいることに強い不安を感じて、シカゴに居るデューイに手紙で相談している⁴⁷⁾。

5) 理想の家庭としての学校

アリスは（同じくデューイも）学校教育は健全な家庭教育の延長ないし拡大として組織されなければならないと考えていた。その際、デューイ夫妻の価値基準となっていたものは、一組の夫婦と子どもからなる一家団欒の健全な家庭生活である。学校は「理想の家庭」として組織されるべきである。「学校は家庭と対比されるべきではなく、ただ家庭ではなしえない知育の時間と便宜とが適切に用意されているというただ一点で、家庭とは異なるだけである」とアリスは書いている⁴⁸⁾。そして、デューイも『学校と社会』の中で同趣旨のことを述べている⁴⁹⁾。

デューイ夫妻が実践した家庭教育の基本的な考え方、すなわち、①子どもとの親密な関係の構

築、②注意深い観察にもとづく子どもの世界の発見、③「独立心」「自恃」そして「自己規律」の育成、④子どもの多様な興味に応える教育環境の用意の4つは、そのまま実験学校の組織原理にもなっている。家庭教育を拡大しながら、なおかつ家庭ではなしえない新しい教育の要素、すなわちアリス・チップマンの言う「知育の時間と便宜」を計画的に用意すること、しかもそれを家庭教育と連続する形で用意すること、それがアリスとジョン・デューイの二人がシカゴ大学教育学科の実験学校に期待したことであった。なぜなら、学校は子どもの興味に即した諸活動を意図的に用意し、その中で子どもたちに知的冒険と疑問と意思決定を促し、自然な形で学習に導いていく場所となるべきであったからである。

注

- 1) *The Correspondence of John Dewey*, CD-Rom edition, Larry A. Hickman ed., IntelLex, 1992. 現在デューイ書簡集は米国 IntelLex 社から電子版 (Electric edition) でのみ利用できる。
- 2) 代表的なデューイの伝記としては以下のものがある。Jane. M. Dewey, “The Biography of John Dewey,” in Paul A. Schilpp ed., *The Philosophy of John Dewey*, Tudor Publishing Company, 1939; George Dykhuizen, *The Life and Mind of John Dewey*, Southern Illinois University Press, 1973; Jay Martin, *The Education of John Dewey: A Biography*, Columbia University Press, 2002.
- 3) Irene Hall, “The Unsung Partner: The Educational Work and Philosophy of Alice Chipman Dewey,” Ed. D dissertation, Harvard University, 2005.
- 4) 宮川麻理「アリス・チップマン・デューイの女子教育論—訪中資料の分析から—」『日本デューイ学会紀要』第49号、2008年9月、21-31頁。
- 5) 以下を参照。Alice C. Dewey, “The Place of Kindergarten,” *The Elementary School Teacher*, vol. 3, no. 5, January 1903, pp. 273-288; Alice C. Dewey, “Education Along the Lines of Least Resistance as Shown in the Laboratory School of the University of Chicago,” *Journal of the Proceedings of the 50th Annual Meetings of the Illinois State Teachers’ Association and Sections Held at Spring Field, Illinois, December 29-31, 1903*, Phillips Brothers, 1904, pp. 102-108; Alice C. Dewey, *Elementary Education: Syllabus, Section I, Course II, Methods: Their Theory and Practice*, New York School of Liberal Arts and Sciences for Non-Residents, 1907, 16 pp., in Katherine Camp Mayhew Papers, Box 21, Folder 2, Cornell University.
- 6) John Dewey, *The School and Society, Middle Works of John Dewey, vol. 1*, Southern Illinois University Press, 1976, p. 4.(宮原誠一訳『学校と社会』岩波文庫、12頁)
- 7) John Dewey, *How We Think* (1910), *Middle Works 6*, 1985, p. 179.
- 8) “Dewey, Alice Chipman,” *Notable American Women, 1607-1850: A Biographical Dictionary*, Edward T. James, editor; Janet Wilson James, associate editor; Paul S. Boyer, assistant editor, Belknap Press of Harvard University Press, 1971, p. 467.
- 9) Max Eastman, *Great Companions*, Farrar, Straus and Cudahy, 1959, p. 273.
- 10) *Ibid.*, p. 273.
- 11) Katherine Camp Mayhew & Anna Camp Edwards, *The Dewey School: The Laboratory School of the University of Chicago, 1896-1903*, Appleton Century Company, 1936, p. 446.
- 12) J. M. Dewey, op. cit., pp. 27-28.
- 13) Mayhew & Edwards, op. cit., p. 5.
- 14) ちなみに、クレーン夫人とリン夫人は妻アリスとともに『学校と社会』第2刷序文の中で特に謝意を表すべき人物として触れられている。*Middle Works 1*, p. 4.(宮原誠一訳、11-12頁) シカゴに来たばかりのデューイの周囲に妻アリスと同じ大卒第一世代に属する高学歴女性が比較的多く集まってきた背景には、ミシガン大学が早く

から男女共学を実施していて、デューイ夫妻はミシガン大学時代からこれらの女性と親交があったことがあるだろう。それともう一つ、ジェーン・アダムズのハル・ハウスが女性の地位向上をめざすこれら高学歴女性の活動の拠点になっていて、デューイ夫妻はそこにも深い関係をもっていたことがあるだろう。

- 15) *Middle Works 1*, p. 5.(宮原誠一訳、17頁。)
- 16) John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, October 18, 1894, John Dewey Papers, Box 2, Folder 9, Special Collections, Southern Illinois University.(以下、JDP 2/9 と略記。) 結局、デューイ夫妻の二人の子どもは実験学校が開設されるまでの一時期、パーカーのクック郡師範学校附属小学校に入学したようである。Laurence A. Cremin, *The Transformation of the School: Progressivism in American Education, 1876-1957*, Vintage Books, 1969, p. 135, 参照。
- 17) John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, November 1, 1894, JDP 2/10.
- 18) Ibid.
- 19) L. A. Cremin, *op. cit.*, pp. 127-28.
- 20) Alice Dewey, handwritten notes on University Elementary School letterhead, [1901-1904], Katherine Camp Mayhew Papers, Box 22, Folder 2, Cornell University, p. 5.
- 21) J. M. Dewey, *op. cit.*, pp. 20-21; G. Dykhuizen, *op. cit.*, pp. 53-54, 参照。
- 22) Willinda Savage, "The Evolution of John Dewey's Philosophy of Experimentalism as Developed at the University of Michigan," Ed. D dissertation, The University of Michigan, 1950; Irene Hall, *op. cit.*
- 23) Alice Chipman to John Dewey, December 22, 1885, John Dewey Papers. ジョージ・モリス (George Morris) はミシガン大学哲学科の主任教授で、デューイの上司にあたる。
- 24) Alice Dewey, lectures notes from the class *Real Logic*, October 1885, Alice Dewey folder, Center for Dewey Studies, Southern Illinois University, Carbondale, 2.
- 25) Willinda Savage, *op. cit.*, p.22.
- 26) Irene Hall, *op. cit.*, p. 36.
- 27) John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, July 4, 5, 1894, JDP 2/6.
- 28) 例えば、以下を参照。John Dewey to Alice Chipman, Frederick A. & Evelyn Dewey, June 14-16, 1894, JDP 2/5; John Dewey to Alice Chipman, Frederick A. & Evelyn Dewey, August 18, 19, 1894, JDP 2/7; John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, September 2, 1894, JDP 2/7.
- 29) Ann Hulbert, *Raising America* (New York: Alfred A. Knopf, 2003), p. 23.
- 30) J. M. Dewey, *op. cit.*, p. 27.
- 31) J. Dewey, "The Psychology of Infant Language" (1894), in *Early Works 4*, 1971, pp. 66-69. なお、この論文が自分の三人の子どもの観察に基づいたものであることは、デューイ自身が晩年にサヴィッジに手紙で証言している。John Dewey to Willinda Savage, May 30, 1949, in Willinda Savage, *op. cit.*, p. 18.
- 32) John Dewey to Alice Chipman, Frederick A. & Evelyn Dewey, August 28, 1894, JDP 2/7.
- 33) Frederick A. Dewey to Alice Chipman & Evelyn Dewey, March 30, 1900, JDP 3/2; Evelyn Dewey to Alice Chipman Dewey, n.d. [1901], JDP 3/3.
- 34) Savage, *op. cit.*, p. 276.
- 35) Savage, *op. cit.*, p. 275.
- 36) G. Dykhuizen, *op. cit.*, p. 66, 参照。
- 37) Savage, *op. cit.*, p. 274. この事件はかなり広く口外されたようで、デューイは妻アリスに宛てた手紙の中で、「フレッドが水を溢れさせて、『いいから、ジョン、黙ってモップをもってきて』と言った話はシカゴでも語り草になっている。こちらに来てから5、6人の人からそれを聞いた」と書いている。John Dewey to Frederick A., Evelyn, & Alice Chipman Dewey, October 27, 28, 1894, JDP 2/9.
- 38) Savage, *op. cit.*, pp. 274-275.
- 39) Ibid., pp. 275-276
- 40) Ibid., p. 276.

- 41) Alice Chipman Dewey to John Dewey, May 18, 1894, JDP 2/4.
- 42) Irene Hall, op. cit., p. 42.
- 43) Lucy Moore to Alice Dewey, May 18, 1899, John Dewey Papers, Box 3, Folder 1.
- 44) John Dewey to Alice Chipman Dewey & children, September 17, 18, 1894, JDP 2/8.
- 45) Alice Chipman Dewey to Frederick A. Dewey, July 27, 1899, JDP 3/1.
- 46) Irene Hall, op. cit., pp. 44-45.
- 47) Alice Chipman Dewey & Fredrick A. Dewey to John Dewey, May 18, 1894, JDP 2/7.
- 48) Alice Dewey, typed manuscript documenting the history of the Laboratory School, n.d. [1904-1906], Katherine Camp Mayhew Papers, Cornell University.
- 49) 「理想的な学校は……たいてい家庭でいろいろな理由からただ比較的貧弱に、偶然におこなわれているものを、計画的に、かつ大規模で、よく考えられた、ちゃんとした方法でおこなうという問題である。そこでまず第一に、理想的な家庭が拡大されなければならない。」*Middle Works I*, p. 24. (宮原誠一訳、51頁)